

---

# 空き缶を投げ捨てる

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空き缶を投げ捨てる

### 【Nコード】

N8154E

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

彼は、公園で歩きながら行儀悪くコーラを飲んでいた。せっかくだからゴミ箱に投げ入れようとしたが、入らない。彼だってそれは意地になった。

誰もいない公園で、一人ジュースを飲みながら歩く幸せは、なかない。

新鮮な空気と一緒に、美味しい飲料を飲んで、自然豊かな道を歩く。些細ながらこの小さな幸せは、彼にとっては重要なものであった。

だから、こうして缶ジュースを飲み干したあとだって、絶対にポイ捨てはしない。必ずゴミ箱を見つけて、そこにちゃんと捨てる。当たり前なことだが大事なことだ。彼はそう思いながら辺りを見渡して、ゴミ箱を探した。

ここはなかなか古い公園ながら、そういった設備はしっかりしていて、少し歩いていると網状のゴミ箱が見えてきた。

箱ブランコのように揺らすことも出来るそれは、彼も他の例に漏れず、子どものころは揺らして遊んでは、母親に怒られたものだった。

そんな懐かしさにふけりつつも、彼はゴミ箱に向かって缶を投げ入れようと高く遠投した。

遠投された空き缶は、ゴミ箱をわずかに飛び越えて、後ろの草むらまで飛んでしまった。

やれやれ、失敗してしまった。彼は、辺りに誰もいないのにもかかわらず、気まずいような表情を周りに向けたあと、空き缶を拾った。

そして、元のところに戻ると、もう一度遠投体勢に入って、投げた。

ヒュンッ。

カンッ……コーンッ！

ゴミ箱の縁に当たると、元持ち主のおでこに戻ってきた。

随分と小気味良い音がしたが、それは空き缶の底の縁が、おでこに当たったからであった。

少しイラッとしながらも、彼は今度こそと、遠投ではなく普通に野球のボールのように、思い切り投げ放った。

投げ放たれた空き缶は、ゴミ箱の網のところに当たって、トランポリンみたいに、空き缶を跳ね返した。

跳ね返された先は、元持ち主の腹。しかも鳩尾に近いあたりだった。

とても苦しそうなうめき声をあげながら、彼はその場に蹲った。そして、空き缶を睨んだ。

スコツ、カーンッ！

一発コンクリートの地面に叩きつけてから、自分の手に戻すと、彼は今度指で丸を作り、ゴミ箱への照準を定めた。

今までの狙いが悪かったのだ。今度はこうして冷静に狙えば間違いはないはずである。

そして彼は、自分の感覚通りに、先程のような投球フォームで空き缶を投げた。

が、わずかな差で空き缶は外れて、また縁に当たると、今度は斜め上に勢い良くすっ飛んでいった。

スコーン。ファサツ。

木の葉のクッションの中に入ったかと思ったそれは、その中の木の枝で何回か反射してから、再び空き缶を元の方角へ弾き返す。

そんな馬鹿など、彼は顔を両手で隠した。

カーン、スコーン！

しかし、弾かれたそれは、再び地面に跳ね返ると、彼の顎目掛けてすっ飛んでいった。

アゴに缶の角が当たったのだから、それはもう溜まったものではなかった。

普段痛い思いをしないところほど、激痛を感じる部位はないのだから。

頭にきた彼は、空き缶を真つ赤な目で睨みつけると、今度は左手を垂直に伸ばした。

投げる方角を正確に決めようというのだ。

そして、感覚をつかんだ彼は、今度は槍でも投げ込むようにして、空き缶を放り投げる。

スポンッ！

まるで猛禽類の急降下のごとくゴミ箱へ突っ込んでいった空き缶は、見事ゴミ箱の中に入った。

ようやく念願になって入ったので、彼は随分とご満悦の様子で、その場を後にしようとする。

が、空き缶の命運はまだここで終わってはいなかった。

入る勢いの強すぎた空き缶は、ゴミ箱を回転アトラクションのようにグルグル回させた。

そしてゴミ箱は、遠心力をこめたまま、再びそこから異物を吐き出すようにして、放り出した。

放り出された空き缶は、立ち去ろうとしていた持ち主の後頭部に直撃。持ち主は後頭部を抑えて、また蹲る。

しばらく苦痛に顔を歪めていた彼だったが、それより今は怒りの感情のほうが強いようで、鬼のような形相になったあと、目の前に転がってきた空き缶を拾った。

そして、また元の位置にわざわざ戻った後で、今度は腕をグルグルと車輪のように回した。そちらが遠心力なら、こちらも遠心力でいこうというのだ。

遠心力も十分つき、投げようとしたその時、タイミングをはずして手を離してしまった彼は、手から空き缶が消えていることに気づいた。

どこにいったかあたりを見渡すが、足元にはない。

どこに転がしてしまったのだろう。このまま見逃して、ポイ捨てのような真似になることだけは、彼は避けたかった。

コーン！

空き缶は見つかった。彼の頭のだ真ん中に落ちてきたことで。

当たり所が悪い意味で良すぎたのか、彼は目も虚ろにその場でしばらくフラつき、宛てもなく数歩歩いた後、背中からズドンと砂埃を立てて気絶した。

さらに、意思でも持っているのか、空き缶は彼の手元ではなく、ゴミ箱の近くまでコロコロと転がった。

しかも止まったのは、何故だか通行道のだ真ん中。

意識をハッキリさせ、ようやく起き上がった彼も、空き缶が自分を馬鹿にしていると思った。

また空き缶を拾ってから、元の位置に戻すと、今度の彼は、手を使おうとはしなかった。

すべてをキックにこめて、彼はそれを思い切り空き缶にぶつけた。カーーン！ パコーン！

ぶつけられた空き缶が砲弾のように飛んでいったかと思うと、またゴミ箱をそれてしまった。

そして、吹っ飛んでいったそれは、なんとこちらに歩いてきていた顔の怖いお兄さんの鼻っ面に直撃した。

怖い顔のお兄さんが、ウーンと唸りながら蹲るのを見て、彼が空き缶を蹴り飛ばしたときの真っ赤な顔が、瞬時に真っ青になる。

これは危ないと彼はこっさり立ち去ろうとするが、お兄さんがそれを許すわけがなかった。

数分後、彼の顔は所々紫色になっていた。

脳がグラグラする感覚を覚えつつも、やはり彼にとって不服極まりないのはこの空き缶だった。

そんなに不服なら、なんとしても遠くから放り込んでやると鼻息も荒く踏ん張った彼は、空き缶を強く蹴り上げようとした。

ところが、蹴ろうとしたはずが位置がずれ、彼は空き缶で滑ったようにして、ステーン！ とすっ転んだ。

空き缶はそのショックでコロコロと転がっていき、通行人の女性のハイヒールのつま先にぶつかって止まった。

女性は転がってきた空き缶を見ると、しれっとした顔でそれをゴミ箱に落とした。とてもあっけなく。

特に用もないのでその場を去ろうとした女性だったが、今まで奮闘してきた彼がそれを許すわけがなかった。

散々「男の戦いを邪魔した」と喚いた彼に対して、女性は鼻で笑いながら、こう告げた。

「そんなことしてる暇があったら、せめてお国のためにでも働いてみたらどう？」

彼は、悔しがりながら地面に倒れこんだかと思うと、自分の頭をスネアドラムのように叩きまくった。まるで狂ったようだった。

（後書き）

デイズニーっぽく理不尽なアクションギャグを書こうと思って奮闘して、大失敗。もう二度とこんなのは書きません。ごめんなさい。こういうのは絵にするからその理不尽さが伝わるんだってのがよくわかりました。小説には小説なりの理不尽さの書き方がもっとあるはず。精進しよう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8154e/>

---

空き缶を投げ捨てろ

2010年10月8日15時50分発行